財団法人
日韓文化交流基金
NEWS
The Japan-Korea Cultural Foundation
2007
no. 42
基金ホームページURL●http://www.jkcf.or.jp
発　行　財団法人　日韓文化交流基金
〒105-0001　東京都港区虎ノ門５丁目12番１号
虎ノ門ワイコービル３Ｆ
電話 03-5472-4323　　FAX 03-5472-4326
発行日　2007年6月29日

「21世紀東アジア青少年大交流計画」はじまる

日韓文化交流基金が外務省より委託を受け、平成元年度（1989年度）から実施してきた青少年交流事業は、平成19年度（2007年度）より新たに「21世紀東アジア青少年大交流計画」が加わり、韓国からの青少年の招聘人数を倍増することになりました。

新規計画の経緯は、今年１月15日にフィリピンで開催された第２回東アジア首脳会議において、「東アジア首脳会議参加国を中心に、今後５年間、毎年6,000人程度の青少年を日本に招く」との安倍総理の表明に基づくものです。「アジアの強固な連帯」にしっかりとした土台を与え、かつ、青少年交流を通じた相互理解の促進を図ることを目的としています。当基金はこの計画の実施団体として、今年度は韓国から約1,000人の青少年を日本へ招聘することになりました。

これに伴い従来の青少年交流事業を再編成し、平成10年度（1998年度）より実施してきた中高生の訪日・訪韓研修に関しては、研修期間を４泊５日から６泊７日に延長して実施します。

これら計画の実施にあたり、学校訪問やホームステイなどの交流行事にみなさまのご理解とご協力をお願いいたします。

日本大学生訪韓研修団

新羅時代の天文台「瞻星台」の前で

日韓文化交流基金は、韓国政府機関と協力し、日本の大学生や教員を10日間の日程で韓国に派遣し、韓国の生活や文化に触れる研修を実施しています。1989年以来約3600名がこの研修を体験し、韓国の人々との交流を深めてきました。
今回は、2007年3月に実施された、日本大学生訪韓研修団の日程を紹介します。
なお、今年度は2008年3月に2団体の訪韓研修を実施します。ふるってご応募ください。

この訪韓研修に参加したのは、自ら応募して選抜された全国の大学生17名です。メンバーの専攻はさまざまですが、いずれも韓国に関心を持ち、韓国語を学習していたり、普段から韓国との交流に熱心に取り組んでいる学生も少なくありません。

ソウルからスタートした研修は、韓国の文化への基本的な理解を助ける講義や体験学習に始まり、大邱、慶州、釜山と韓国各地を回りながら、遺跡や文化遺産を見学するほか、南北分断の問題や、都市計画、産業発展といった現代的な問題についても、その現場を訪れるプログラムが組まれています。

2回の大学訪問と、週末のホームステイは、研修の中でも重要なプログラムです。今回は高麗大と嶺南大を訪問し、韓国側の学生たち自ら大学の中を案内し、施設の紹介などをしてくれたほか、嶺南大ではホームステイの受け入れも行われ、大学生のパートナーの家で週末を過ごしました。韓国の同世代の若者と多くの時間をともにし、心を開いて話し合ったことは、相手のことを知るばかりではなく、自分や自分の国のことについても見つめなおす貴重な機会となりました。

高麗大の学生たちとの交流

研修が行われた3月下旬は、真冬の寒さと春の暖かさが交互にやってくるような不順な天候でしたが、ソウルから南下していくうちに、桜やケナリ（レンギョウ）の蕾が日増しにふくらんでいくのが、忙しい研修日程の中で目を楽しませてくれました。10日間の研修を終えて、「韓国の『顔が見える』ようになった。個人や地域の違いが見えた気がする」、「ホームステイのパートナーや、研修団のメンバーなどと出会えたことがすばらしかった」、「次に来るときまでにもっと韓国語を勉強しておきたい」といった感想が聞かれました。

嶺南大のEラーニング施設を見学

韓国の多様な姿に触れ、さまざまな人に出会った今回の研修によって、日本の若い世代の韓国に対する理解が複眼的で豊かなものとなることを願っています。

主要日程

3/19（月）	事前研修会
3/20（火）	ソウル着
3/21（水）	主催機関によるブリーフィング
	特別講義「日韓文化比較」　講師：崔相龍高麗大教授
	歓迎昼食会
	韓国伝統文化体験
	景福宮、国立民俗博物館見学
3/22（木）	板門店見学
	清渓川一帯見学
3/23（金）	高麗大訪問
	自由研修
3/24（土）	南山韓屋マウル見学
	ソウル→東大邱（KTX）
	ホストファミリーとの対面式（嶺南大）
	ホームステイ
3/25（日）	ホームステイ
3/26（月）	嶺南大訪問
	LG電子亀尾工場見学
3/27（火）	慶州見学
3/28（水）	自由研修（釜山）
3/29（木）	帰国

※日程や訪問先は、研修団ごとに異なります。

日本大学生訪韓研修団　2007年度参加者募集

2007年度の訪韓研修に参加する大学生36名を以下の要領で募集します。

日　程

Aコース…事前研修会　2008年3月3日(月)14：30より
訪韓期間　2008年3月4日(火)～3月13日(木)
Bコース…事前研修会　2008年3月17日(月)14：30より
訪韓期間　2008年3月18日(火)～3月27日(木)

研修の目的

韓国に対して深い関心を持つ日本の青少年を韓国に派遣し、韓国の生活や文化に触れることを通じて、韓国への理解と交流の増進に寄与することを目的とします。

派遣人数

各20名（団長１名、事務局１名、学生18名）

研修内容例

左記事の「主要日程」を参考にしてください。
＊ホームステイは１名１家庭の受け入れとなります。
＊訪問地は諸事情により変更することがあります。

応募資格

1．日本国籍または日本での永住権を有し、日本の４年制大学の学部に在籍する者。
2．訪韓時に30歳以下であること。
3．韓国における長期滞在の経験がないこと。
4．(財)日韓文化交流基金主催または外務省と共催の大学生訪韓研修団への参加経験がないこと。

費用負担

＜主催者負担＞

1．往復の航空運賃、空港使用料及び航空保険料
2．韓国における滞在費
3．訪韓前日の宿泊費（東京都内で宿泊）
4．宿泊場所から成田空港までの交通費（貸切バスで移動）

＜参加者負担＞

1．訪韓前日の事前研修会会場（当基金）までの交通費
2．帰着空港からの交通費
3．日程中、公式訪問先に贈る記念品代（3,000円程度）

応募方法

(財)日韓文化交流基金ウェブサイト（http://www.jkcf.or.jp）からオンラインでお申し込みください。
＊ウェブサイト上から申し込むフォームとは別に在籍大学の教員からの推薦状が必要になります。

募集締切

2007年７月20日(金)午後５時締切
＊選考の結果は、９月上旬頃、応募者全員に郵送で通知します。
＊詳細は当基金ウェブサイトをご覧ください。

助成事業紹介

日韓の文化コンテンツ産業のパートナーシップの構築をめざして「コンテンツショーケース2007 in 関西」

コンテンツショーケース2007 in 関西実行委員会 事務局長　杉浦幹男

官民一体となったコンテンツビジネスの発信

去る2月6日（火）・7日（水）の両日、シティプラザ大阪、大阪産業創造館において、「コンテンツショーケース2007 in 関西」が開催された。

このイベントは、これまで個別に開催されてきた4つのイベント、大阪府主催の展示会、クリエーター人材派遣会社である（株）デジタルスケープ主催のネットアニメの上映会、関西デジタルコンテンツ事業協同組合主催および大阪商工会議所主催のセミナーを一堂に会して開催したものであり、官民が一体となって、大阪から新しいコンテンツビジネスを発信しようとする取り組みである。

新しい産業としてのコンテンツ産業への注目

近年、コンテンツ産業が国際競争力のある新しい産業として注目されている。コンテンツ産業とは、映画、アニメ、ゲームそして音楽等の「文化」の産業化である。

アジア諸国では、隣国・韓国が映画やドラマを輸出産業として位置づけ、「文化産業」の振興に積極的に取り組んで成果を挙げている。わが国にも「韓流ブーム」をもたらしたことは、記憶に新しい。近年では、CG（コンピュータ・グラフィックス）アニメーションやオンラインゲームの振興に取り組み、今後、「文化産業五大強国」の実現をめざしている。さらに、シンガポールや上海、香港等のアジア圏での競争が激しくなっている。

一方、わが国のコンテンツ産業は、日本発のアニメーション「ジャパニメーション」やゲーム産業など、国際競争力のある分野として、世界中から注目を集めている。だが、現状は、テレビのキー局や出版社など、配給、流通機能を担う企業が東京に集積し、一極集中が顕著な分野であり、地方からの発信は弱い。

ソウルアニメーションセンター（SAC）の出展ブースの様子

アジアとともに発展、成長する大阪、関西

本イベントは、今後のアジア諸国の発展、成長に特に着目し、とりわけ成長が著しい韓国とのパートナーシップを構築し、一極集中の現状と悪循環を断ち、大阪、関西、そしてアジア全体の国際競争力の強化と活性化を図ることを目的として開催された。キーワードは、「アジア」そして「デジタルコンテンツ」である。

本イベントでは、様々なアジアとの連携に向けた取り組みが試みられた。韓国からは京畿デジタルコンテンツ振興院（GDCA）とソウルアニメーションセンター（SAC）の協力の下、22の関係機関、企業が出展し、47人が来阪してビジネスと文化の交流を行った。オープニングセレモニーの基調講演、韓国企業のプレゼンテーションなども開催され、参加企業のうち約半数が、日本市場への進出や共同プロジェクトの実現に向けた商談を実施し、今後のビジネス展開につながるという成果があった。また、CGアニメーションの上映会や、日本のアニメ事情にも詳しいSACのキム・セジュン氏による日韓の相違についての講演も行われた。

今回の開催にあたって、最も苦労した点は、コンテンツ産業が東京一極集中するなかでの、来場者の誘客が大きな課題であったが、それ以上に韓国やアジアの文化コンテンツ産業が知られていないという事実であった。まだまだ日韓の文化コンテンツ産業の交流は、ビジネス面でも、そして文化（消費）面でも、不足している。

こうした商談を目的としたイベントは、一過性のものとしてしまっては意味がない。これを契機として、継続的な交流を続けることによって、新しいより親密な日韓関係が構築できるのであろう。そのため、引き続き参加企業と大阪、関西の企業との交流、ビジネスマッチングを支援している。

PROFILE
すぎうら　みきお

大阪市立大学都市研究プラザ特任講師。大阪デジタルコンテンツビジネス創出協議会（ODCC）プロジェクトマネージャー。NPO法人映像産業振興機構（VIPO）大阪事務所長。コンテンツショーケース2007 in 関西実行委員会 事務局長を務める。

助成事業紹介

日韓代案教育シンポジウム報告

NPO法人東京シューレ　シューレ大学スタッフ 朝倉景樹

2007年５月３日に韓国全国とソウル市内のネットワークに参加しているオルタナティヴスクール関係者と東京シューレのスタッフ、学生が参加して「日韓代案教育シンポジウム」が開かれた。日本ではフリースクールという言葉が教育関係者のみならず広く使われるようになっているが、韓国ではオルタナティヴスクールという言葉の方が一般的で、「代案学校」と韓国語に訳されて広く使われている。

今回の企画では、日韓の代案教育関係者のシンポジウムを開くだけではなく、４月27日から韓国の代案教育を代表するいくつかの異なったタイプの代案学校を訪れ、現場で小シンポジウムを重ねた。これらシンポジウムを併せると200名を超える代案教育関係者と交流した。同じオルタナティヴ教育の現場にいる者同士、お互いの教育実践を知るだけでも興味深かったが、その苦労も十分理解できるだけに気持ちの通い合う交流になった。

勃興する韓国の代案教育

韓国では1997年のガンディースクールの設立が代案学校の始まりと言われている。その後徐々に広まっていったが、この３、４年で急速にその数を増やし、現在では全国に約100を数えるまでになっている。また、教育界のみならず代案学校は社会にも知られるようになってきており、その存在は急速に市民権を得つつあるようだ。

この急速な広がりの背景には、激烈な受験競争に象徴される韓国の学歴社会がある。今回の訪韓の中で、ソウル市鷺梁津の予備校街でのフィールドワークも行ったが、インタビューをした予備校通いをしている高校生は、一日８コマの高校の授業では足りないので、予備校に通い、家でも勉強をすると、睡眠時間は４、５時間になると言っていた。受験のための知識の詰め込みだけでなく、いじめ、不登校などが社会的に問題視される状況があり、現在の教育に対する親・市民の不満を背景に代案学校が急成長している。

代案学校のスペクトラム

代案学校には学校として認可されているものとされていないものがあるが、どちらの代案学校も社会からは学校として認識されており、日本のフリースクールと随分違う状況がある。韓国の代案学校は大きく分けると農村地帯にある寮制のもの、都市部にあって通学制のものになる。

農村型の代案学校は環境に対する意識が高いものが多い。訪問したガンディースクールでは、田畑を持ち農業を体験するだけでなく、育てた農作物から味噌を作ったり、独自に作った便所を利用して肥料を作ったりもしていた。また、地域とのつながりを重視しており、共同体づくりに力を入れていた。都市型代案学校でも、ソンミサンスクールは地域の共同保育や環境運動の中で生まれてきた代案学校ということもあり、地域共同体ということを意識していた。また、ソンミサンスクールでは屋上にビオトープを作るなどの環境教育を行っていたり、以友学校では全ての電力を太陽光発電で賄っているなど、都市型代案学校でも環境への意識が高い様子がうかがえた。

代案学校の人数規模は一般学校に比べると概して小さいが、子どもが数名のものから240人規模のものまで様々で、共同体をつくって生きていくというところに重きを置くところもあれば、子ども同士が教え合うことを含め

代案教育で存在感の大きいハジャセンターのパフォーマンス活動

自分の頭で理解することを重視した教育に重点を置くところ、映像表現や音楽やダンスなどの身体表現を通して生活していけることまでを射程に置いているところなど様々である。

今回の訪韓で日本の参加者からは「韓国の代案学校の多くが共同体という言葉で社会の中での繋がり合いを意識していることが新鮮だった」などの声が聞かれ、また、韓国側からは「子ども・若者中心の場の運営の仕方をシューレから学びたい」というような声も聞かれた。お互いに、今後とも経験を共有し、繋がり合っていきたいという思いを確認した。

訪問した代案学校

［ソウル］
ハジャセンター、ハジャ作業場学校、ミンドゥルレサランバン、ソンミサンスクール、草の根社会大学、以友学校

［安山］
野の花の咲く学校

［堤川］
ガンディースクール

PROFILE
あさくら　かげき

東京シューレのフリースクール部門のスタッフを経て、現在、オルタナティヴ大学部門である「シューレ大学」のスタッフを務める。社会学者としても研究活動をしており『登校拒否のエスノグラフィー』（彩流社、1995年）などの著書がある。

フェロー研究紹介

「海の国境から見えてくるもの―韓国ナショナリズ

竹島を見に鬱陵島へ

本年２月に筆者は鬱陵島に渡った。目的は竹島（独島）を見てくることだ。鬱陵島には冬季を除くと毎日のように竹島を遊覧し、状況がよければ竹島に降りられる船がある。時期的に今回は竹島までは行けないだろうが、メディアを騒がせているものの、１回も見たことのない竹島を眺めてみたい。ついでに、鬱陵島という離島から韓国のナショナリズムを考えてみたい、そう思っていた。

鬱陵島には空港がないため船で行くしかない。フェリーは浦項から毎日朝10時に出ている。ソウルに住んでいた筆者は前日の晩に４～５時間セマウル号に揺られながら浦項を目指した。港前の安旅館で１泊し、定刻に出航するフェリーにゆっくりと乗ることができた。予定通りに運行されれば、だいたい午後１時半ぐらいに着くという。ちなみに、ソウルから浦項までのチケットは４万５千ウォンぐらい、そして浦項から鬱陵島までの渡航費は５万ウォンほどだった。

「鬱陵島には円を両替できる金融機関はないですよ。それから、クレジットカードもほとんど使えないし」出発前、迂闊にもウォンをあまり準備していなかった筆者に、浦項のフェリー乗り場にいた職員はこういった（後でわかったことだが、実は農協などで外貨の両替はできる）。仕方なくカードで泊まれるというその職員が勧めるヴィラに宿泊することにしたのだが、いま考えるとうまくのせられたのかもしれない。

鬱陵島の第一印象はけっこう険しい地形であるということと、杉が多いということであった。今回のフェローシップの期間は2006年10月１日から2007年３月31日までだったので、花粉症に苦しんでいる筆者は、２月、３月に杉の少ない韓国にいられることをひそかに喜んでいたが、港に立ったとたんに目鼻がむずむずしはじめた。

さて、２泊の予定で入港したものの、後に述べるように４泊する羽目になってしまった。しかし、その分、竹島をめぐる島民の気持ちも少しはわかるようになった。

かつて『竹島は日韓どちらのものか』（下條正男著、文春新書、2004年）という本を読んだことがある。竹島が日本と韓国のどちらのものかということに対しては、筆者はまったくといっていいほど関心を持っていないのだが、「竹島は日本領だ」あるいは「独島は韓国領だ」と考える思考のメカニズムには興味がある。先の下條氏の著書は、それが日本領であることを韓国側の意見に反論するかたちで主張している。それが正しいかどうかを判断する材料を筆者は持っていないが、納得させられるものではあったことは付け加えておこう。もちろん、韓国側からは反論がでるようなものかもしれないが。

「独島記念館」の公園にて

竹島と隠岐

竹島がもし日本領だとすれば、そこは島根県の土地ということになる。いちど国境の島・隠岐には行くべきだろうと思い、２年前に調査に出たことがあった。その時感じたのは、隠岐が対馬や壱岐と違い、大陸、朝鮮半島との交流やその歴史にあまり関心を示していないということだった（信憑性のかなり薄いものではあるが、朝鮮語が混じった伝承歌謡が隠岐五箇村の記録にあった。詳しくは拙著「隠岐島伝統歌謡について」、『アジア社会文化研究』第７号、2006年）。むしろ、後鳥羽上皇や小野篁の流刑地として、都との関係がより強調されており、郷土文化も相撲や伝統芸能など、日本文化の「源流」に連なるものが打ち出されていた。それがいま、離島隠岐の観光資源となっているわけだ。それでは、竹島を中間において隠岐と向き合う鬱陵島はどのような状況なのだろうか。

海が少し荒れ、船酔い気味だった筆者は、とりあえず初日は休むことにして、翌日「独島記念館」に向かった。入場無料で竹島関連の資料や、竹島を守備していた義勇軍の記録が展示されている。また、前出の下條氏の本で批判されている、李氏朝鮮時代に日本に渡って「独島」の領土権を主張したとされている「安龍福」についての展示も大きかった。見物客は筆者しかおらず、ゆっくり見ることができたが、むしろ「独島記念館」の公園に立っている「対馬も韓国領」であるという大きな石碑に目を奪われた。対馬が韓国領であるという意識は、韓国にはいまだにくすぶっているようで、韓日関係史研究会編『独島と対馬島』（知性の泉、

ムと観光」

県立広島大学人間文化学部准教授　李建志

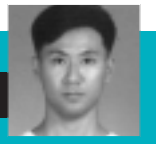
1996年、ソウル）にも間島（中国延辺地域）とともに「対馬故地意識は潜在している」（155頁）とある。現に筆者が対馬を訪れた2003年と2005年にもこれは感じたことであった。対馬厳原の居酒屋に韓国人がハングルで残したメッセージが店中に貼られていたが、およそ50枚ほどはあるであろうそのメッセージの中、10枚ほど「対馬は韓国が取り返すべき領土だ」という書き込みがあったことをおぼえている。その店はなんと韓国人が酒を持ち込むことまで認めるほど対韓友好につくしているにもかかわらず、店主が韓国語をわからないことをいいことに、韓国人観光客はそんな書き込みを平気でしていくのだ。なぜそんなまねをするのか、悲しくなったのを思い出す。でも、あれは氷山の一角に過ぎなかったのだ。

離島の「観光資源」とナショナリズム

海は荒れ、帰りのフェリーは予定日に出航せず、結局二日間も延泊せざるを得なかった。そして街（？）へ出てみようと思い立った。ここで親しくなった人たちに、鬱陵島の産業は何かときいてみた。すると、異口同音に「観光」と答える。郷土資料館の展示によれば、この10年で名物のイカの漁獲量は激減し、それにかわる名物を模索しているという。たとえばアワビ、そしてカボチャ。しかし、観光客たちがさほど惹かれるとは思えなかった（アワビの価格は済州島より５割増し）。最初に述べたように、ソウルの人が鬱陵島に来るには、片道で10万ウォン、往復で20万ウォンのお金がかかる。また片道８時間ほどの移動時間が必要とされる。しかも、海が荒れれば予定通り帰れなくなることもある。物資は陸地（本土）から送られてくるものに依存しているのだから、当然物価も高い。島民の高齢化、過疎化も進んでいる。それに対して済州島は飛行機でひとっ飛びであり、往復の交通費も17万ウォンで済む。どうしても観光客へのアピールは弱くなるだろう。その鬱陵島が、済州島にないものを持っているとしたら、それは「独島」だけなのだ。すでに述べたように、「独島」行きの船は冬季を除いて毎日のように出ている。鬱陵島は反日ナショナリズムが燃えることで、観光客を惹きつける可能性を得たのである。

陸上交通と航空サービスが発達した現代、離島はどんどん取り残されていく。200海里などの問題もあり、漁業はそれほど期待ができないとすれば、経済的な自立は観光に頼らざるを得ないだろう。竹島を中間において鬱陵島と向かい合った島である隠岐は、相撲や伝統芸能などが観光資源となっている。それは表面的には非政治的に見えるが、後鳥羽上皇などを通して、容易にナショナリズムへとリンクする「無意識のナショナリズム」＝「非政治の政治」が隠されているのだろう。しかし、鬱陵島の場合はより直接的に「領土的ナショナリズム」を展開することを観光資源としているのである。これは領土問題以前に、離島問題そのものがより深い部分にあるのではないかと、旅を終えて思った。

PROFILE
り　けんじ



1969年、東京生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。京都ノートルダム女子大学専任講師、県立広島女子大学助教授を経て、2005年4月より現職。専門は比較文学比較文化、朝鮮近代文学。

フェロー研究紹介

わらべうたに対する保育者の考え方に関する日韓

わらべうたと幼児教育

幼稚園や保育園に行くと、日本では、「どんぐりころちゃん　あたまはとんがって　おしりはぺっちゃんこ　どんぐりはちくりしょ」とか、韓国では「トゥコバ　トゥコバ　ホンジプジュルケ　セジプタオ（がまよ、がまよ、古いお家やるから、新しい家おくれ」と歌いながらわらべうたを楽しんでいる場面が見られる。

一般的にわらべうたは、「子どもの歌」といって子どもが歌う歌全体をいうが、実際は昔から今日まで口から口へと歌い継がれている伝承童謡をいっている。これらの伝承童謡は広い意味では「伝承遊び」に含まれるが、これを日本は「わらべうた」と、韓国は「伝来童謡」あるいは「伝承歌遊び」などと呼んでいる。

筆者は、保育現場で子どもとともに過ごすのが好きで、子どもの遊びに入れてもらうことが多い。2006年９月から訪日フェローとして名古屋にきて、週一回はかならず子どもとわらべうたで遊んで（教えてもらって）いる。保育の場に行って今の子どもたちの様子を聞いてみると、各園とも抱えている問題は共通している。言葉が乱れ、年相応の対話ができない。ゲームやテレビなどに遊びが偏り、集団遊びが不得意で仲間関係に問題がある。身体的にたくましさが衰え、感情を抑えられずに、すぐ手が出る。感情の表し方や遊び、仲間関係でのかかわり方に問題がある子が多い、と保育者たちは言っている。このような状況の中、人間として成長の基礎となる乳幼児期を少しでもよい方向に向かうように取り組みたいと保育者たちは思い、わらべうたを解決手段の一つとして取り上げるようになった。

教材としてのわらべうた

わらべうたは子どもたちの成長を育む教材として、保育の現場と親子のための子育て支援に広く活用されている。特に最近、わらべうたが保育に積極的に取り入れられるきっかけになったのは、次のような理由からである。

第一に、教育者たちがわらべうたの教育的価値を評価するようになったからである。例えば、ドイツのカール・オルフやハンガリーのコダーイは、自国で受け継がれてきた音楽を重要視し、音楽の基礎教育としてそれぞれの民族の独特な音楽を取り入れた。彼らはその結果、これらの音楽教育は子どもに音楽ばかりでなく母国語の基礎形成、人格形成に大きく影響すると報告した。

第二は、わらべうた経験が、幼い子どもたちが自国の文化を理解する基礎になるとともに子どもなりのアイデンティティを育む保育の教材として認められてきたからである。韓国は、教育部が幼稚園で適用可能な伝承遊びを10種類選定して、「幼児のための伝承遊びの教育的活動指導資料」（1993）と、「幼児のための伝統文化活動資料」（2000）を作って幼稚園に配布し、幼児教育目標を実現させる内容として紹介した。さらに、教育課程が追求する人間像を「我が文化についての理解の上に新しい価値を創造できる人」であるとして、伝統文化についての理解が基礎である、と述べている。日本の、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」では伝統文化教育について述べてはいないが、わらべうたを含む伝承遊びを取り入れている園は99%に上っている（2005、穐丸他の調査）。また、保育者たちには、伝承遊びが子どもの発達と成長に有効であり、日本の遊び文化を継承するものであるという共通の認識がある。

日本のわらべうた教育
名古屋にあるK保育園の子どもたちがわらべうたに合わせて「門くぐり」の遊びをしている

比較研究

慶南大学校幼児教育科教授　朴香俄

しかし、今の多くの保育者は保育者自身の伝承遊びに対する力量不足を感じ、研修の必要性を認めている。

保育者とわらべうた

筆者は、保育の実践者である保育者のわらべうたに対する考え方について、日韓の比較調査研究をしている。本研究で取り上げている調査内容は、保育者が考えているわらべうたの教育目標、実施動機、学習ストラテジーに関するものである。本稿では、本調査の質問紙作成のために行った、2006〜7年の保育者を対象とした予備調査から明らかになった内容をまとめて紹介しよう。

第一は、わらべうたが子どもの成長にどのような働きをするかというわらべうたの教育目標である。日韓とも、保育者のわらべうたに対する教育目標は非常に高く、内容的に同一なものが多い。子どもは、それぞれの国の日常の話し言葉の抑揚にそって自然な歌になっているわらべうたの経験を通して、言語や知恵が身につき、仲間遊びが豊かなわらべうたから人とのかかわり方や人への信頼感や親密感を感じることができる。また、外遊びや体を動かす遊びが豊かになって、たくましさが育くまれる。以上のように、両国の保育者たちは、わらべうたによって子どもの「知性」、「豊かな心情と社会性」、「活発な身体」が育つことを期待して、わらべうたの教育目標としている。

第二は、わらべうたを保育に取り入れるようになった動機である。動機付けは「目標に向かった行動を喚起し、それを支援するプロセス」と定義する。日韓の保育者の動機付けの傾向にやや差はあるが、内容をみると、自己決定の差によって「国家水準の教育課程に書かれているから」、「園の方針で」、「他の人が取り入れているから」、「自分にとって重要だからやる」などという様々な外発的な動機付けの傾向と、「自分の純粋な興味や、自分の関心からやる」という自己決定の度合いが最も高い内発的動機付けの傾向が見られる。

韓国のわらべうた教育
釜山のSオリニジプ（保育園）の子どもたちがわらべうたに合わせて「門くぐり」の遊びをしている

第三は、保育者がわらべうたを学ぶときのストラテジーに関するものである。言語学習の理論に基づいて保育者の学ぶ姿勢を分析した結果、保育者は、自分の記憶に残っているわらべ歌を練習するか、あるいは、新しく出会った曲を繰り返し練習する「記憶ストラテジー」、わらべうたを分析したり、保育に取り入れるために工夫をする「認知ストラテジー」、わらべうたに関する知識が十分でなくても曲のイメージから遊び方をいろいろ考えて自分の限界を克服する「補償ストラテジー」、自分が学んでいるわらべうた学習を順序立てて計画したり評価する「メタ認知ストラテジー」、学んでいる自分を勇気づける「情意ストラテジー」、専門家の協力を得たり、他の人と感情移入をする「社会的ストラテジー」をとる。日韓の保育者の学習ストラテジーの傾向の差はあるが、大体それぞれのストラテジーを一つずつ独立的に使うことなく、自分のストラテジーを評価しながらいくつかのストラテジーを調整したり補って使っている。

いま保育現場では、わらべうたに対して「生きているわらべうた」、「子どもを救うわらべうた」などと、肯定的な評価をしている。筆者は、本研究が両国において子どもを中心に交流を深めていく一つの架け橋になることと、本研究を通して日韓の保育の内容を豊かにしていく知恵が得られることを期待している。

PROFILE
パク　ヒャンア

慶南大学校幼児教育科教授。2006年9月から2007年7月までフェローとして日本福祉大学COEプログラム客員教授として来日。お茶の水女子大学大学院修了（修士・博士）。専門は遊び研究で、特に伝承遊びに関心がある。

交流エッセイ

朝鮮通信使の饗応にみる交流

梅花女子大学短期大学部教授　高正晴子

江戸時代の慶長12年（1607）から文化８年（1811）にかけて、親善使節の朝鮮通信使が12回来日した。通信使の使命は修好や将軍襲職の祝いなどで、目的地は、２回目の元和３年（1617）には京都、文化８年には対馬、それ以外は江戸で、一行の人数は三百数十人から五百人であった。

通信使へ饗応された御馳走

７回目の天和２年（1682）に通信使船で来日した一行は、壱岐の風本、藍島（相島）を経て赤間関（下関）から瀬戸内海へ入り、大坂に着船して河口で川御座船に乗り換え、淀川を遡上して淀で下船し、京都、名古屋を経て江戸へ到着し、江戸で使命を果たした後には往路と同じ行程をたどり帰国した。通信使の宿泊や昼休憩には、寺院、御茶屋、本陣などがあてられ、接待は各地の御馳走人である大名が行った。江戸への往路の食事は、正使・副使・従事官の三使と上々官には七五三引替三汁十五菜などの御馳走が出された。この七五三とは本膳に七品、二膳に五品、三膳に三品の御馳走の載る儀礼膳で、これに引き替えて食事用に三汁十五菜が出され、上官・中官・下官にもそれぞれの身分に応じた御馳走が出された。江戸からの復路には、三使・上々官・上官に食料供給が行われ、中官・下官には日本料理が供された。

江戸城においては、国書伝命後の宴で三使上々官に七五三追膳が饗された。七五三は儀礼膳で追膳の四つ目と五つ目は食事用の御馳走である。正徳元年（1711）の献立（表）とその再現料理の写真のように大変豪華な御馳走の数々であった。

正徳元年の再現料理の一部

正徳元年に江戸城において饗された献立

七五三献立（正徳元年）

七五三本膳
発魚　唐墨盛　蒲鉾
海月盛　飯　手塩　箸台
角盛　いか盛　小桶
二之膳
雲雀盛　ふか白髪盛　汁
貝盛
真鰹盛　鮟足り盛　汁
三之膳
小刺　汁
辛螺盛
蟹盛　汁
追膳
四つ目
差身　高麗煮
煎酒
五つ目
杉焼
酢貝　盛合
湯次　食鉢
奈良台　吸物
三つ星の物　鉋子　加　折
菓子　三つ星の物

通信使たちの好物

遠来の賓客をもてなす饗応のために客人の好物を調べることが準備の一つであり『通行一覧』の慶長12年の記録には、朝鮮人の好物として、庭鳥、豚、鳩、鴨、鶉、雀、鯛、鯰、蒲鉾、鯉、鮒、雲雀、鮑などがある。また延享５年（1748）の記録にも好物の魚介、獣鳥肉、卵など63種をみる。そのために各地で雉、鶏、卵、猪、豚、鹿などが提供された。当時表向きには四つ足の獣肉は忌み嫌われ、また精進料理に用いることのない猪や鹿を寺の台所に運び入れるために、正門の脇に別の門をつけた彦根の宗安寺の例もある。

三使・上々官・上官に提供された食料は、米、酒、味噌、醤油、酢、塩などをはじめ、鯛、鱸、鯉、鰆、蛸、かれい、伊勢海老、鮑、さざえ、蒲鉾などの魚介、大根、ねぶか、冬瓜、生姜、菜、人参、茄子、松茸、椎茸、山芋、里芋、柿、梨、葡萄、九年母（くねんぼ）（みかんの一種）、蜜柑、林檎などの野菜や果物があり、これらは通信使一行中の刀尺（料理人）により調理された。また有平糖、かすてら、饅頭、落雁、外郎餅などの菓子も提供された。

調理技術の向上と食文化の発展

正徳元年の記録によると「猪肉を汁にするときは、牛蒡、せり、いりこなどを取り合わせる」、「鹿肉は油、醤油を付けて炙り、小串にさす。また汁にもする」、「雉は油、醤油を付けて炙る。汁はすまし仕立てにして時節の野菜を取り合わせる」などの記載があり、これらは宿所や昼休憩地の台所で刀尺による調理を手伝った人により記録されたものであろう。そして、それらの料理法はその後近隣に広まっていったことと推察できる。また各地では、前回の記録をもとに通信使を迎える準備をし、そのために調理技術や製菓技術の向上が来日のたびに図られたことであろう。そして、通信使をもてなすための武家社会の饗応料理も饗応に携わった人々により次第に広まっていったと考えられる。このようにして通信使の来日は日本の食文化の発展に大きく影響を及ぼした。

通信使接待は人々の重要な文化交流の場になり、幕府をはじめ諸藩で通信使一行の迎接を滞りなく行ったことにより江戸時代を通して日本と朝鮮の善隣友好関係は長く続けられた。

PROFILE
たかまさ　はるこ

梅花女子大学短期大学部教授。著書に『朝鮮通信使の饗応』（明石書店、2001年）、『赤米に魅せられて』（共著・窓映社、1997年）、『食文化論』（共著・建帛社、1995年）などがある。

日韓文化交流基金事業報告

訪日団

団体名	団　長	計	男	女	期　間	訪問校
韓国教員（第１団）	金喜泳 元峰中学校 校長	20	10	10	5/8−5/17	都立港養護学校、川崎市立川中島中学校、和歌山市立広瀬小学校
韓国教員（第2団）	金明姫 磨石中学校 校長	20	6	14	5/8−5/17	都立美原高等学校、川崎市立富士見中学校、一宮市立尾西第一中学校（愛知）

広瀬小学校で授業を見学する韓国教員訪日団（第１団）

愛知県稲沢市にて歓迎会で歌を披露する韓国教員訪日団（第２団）

訪韓団

団体名	団　長	計	男	女	期　間	訪問校
日本大学生（第2団）	生越直樹 東京大学大学院総合文化研究科 言語情報科学専攻 教授	19	5	14	3/20−3/29	高麗大学校（ソウル）、嶺南大学校（慶山）

報告書

以下の報告書が完成しました。これらの報告書は基金図書センターにおいて閲覧が可能です。

- 第6回日韓・韓日歴史家会議「歴史家はいま、何をいかに語るべきか」（2006年10月27日〜10月29日）報告書
- 日本大学生訪韓研修団<第1団>（2007年3月6日〜3月15日）報告書
- 日本大学生訪韓研修団<第2団>（2007年3月20日〜3月29日）報告書

理事会

４月６日に第40回理事会が開催され、平成19年度の事業計画案および予算案が承認されました。また、６月１日には第41回理事会が開催され、平成18年度の事業実績および決算が承認されました。役員の異動は次のとおりです。

理事　　退任　　瀬島龍三（前伊藤忠商事（株）特別顧問）
理事　　退任　　竹下勅三（平成18年11月30日死去）

図書センター貸出点数、利用登録変更のお知らせ

４月２日より、貸出点数と利用登録の規則を一部変更し、学生の方は利用登録料が無料になりました。

貸出点数

旧	5点まで	新	7点まで（うち視聴覚資料は5点まで） ※貸出期間は今まで通り２週間です。

利用登録料

旧	年間1,000円	新	学生は無料（学生証の提示が必要） ※一般の方は今まで通り年間1,000円

ご好評につき、利用登録者の方には「ハングルキーボードシール」を継続配布しています。

韓日文化交流基金　日本文化視察団

５月25日（金）から29日（火）にかけて、団長・李相禹理事長（翰林大学校総長）ほか11名からなる韓日文化交流基金の第20次日本文化視察団が来日しました。28日（月）には藤村正哉日韓文化交流基金会長主催の歓迎晩餐会を開東閣（東京都港区）で開催し、当基金役員と意見交換を行いました。

維持会員

維持会員制度へのご加入ありがとうございました。
2007年３月１日～５月31日の期間に、59名の方に維持会員制度にご加入いただき、111万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます。お名前後ろの（　）内数字は、２口以上のお申し込み口数です（五十音順、敬称略）。

個人会員　51名

饗庭孝典	青野正明	秋月望	朝倉敏夫
阿部孝哉	石川武敏	石渡延男	岩本卓也
梅山秀幸	大谷森繁	岡田浩樹	小倉紀藏
生越直樹	金丸守男	岸真清	木村光一
熊野清貴	黒江克彦	桑原きよみ	齋木崇人
阪田恭代	櫻井浩	佐々木史郎	柴公也
清水信行	十四代　沈壽官	白川豊	須川英徳
田代和生	田中勲	田中正敬	都恩珍
戸塚進也	中江新（5）	永島広紀	中野照男
中山武憲	並木正芳	新納豊	波田野節子
浜田孝子（2）	福井玲	福士慈稔	福原裕二
松本厚治	真鍋祐子	茂木敏夫	山根真理
柳震太	和田とも美	渡辺浩	

特別会員　8名

梅田博之	小山敬次郎	千玄室	楢崎正博（2）
堀泰三（2）	前田二生（2）	三浦隆	水谷幸正